教育のシステム化と民主教育

佐々木　享

一

「システムとは、ある共通の目的や計画のために多種多様な要素から形作られている一つの複合体であり、システムを構成する各要素はお互いに規則的な相互作業と相互依存を保つことによって、共通な目的や計画を達成するための動的（ダイナミック）な結合関係をもっている。したがって、ある種の目的のための物事の体系とか仕組みとか行為の手順、やりかた、あるいは両者の混合体系は、すべてシステムと呼べる。」このような意味において、授業における教師と生徒との関係つまり授業過程を一つのシステムとしてとらえることは、教授過程を科学的に分析する前提として、重要な意味をもつと考えられる。しかしながら、教授過程を一つのシステムとしてとらえようとすることは、最近一部の人々の間でジャーナリスティックにいわれているような「教育のシステム化」をすすめることとイコールではない。以下にのべるように、教授過程をシステムとして把握しようとする場合には、現代の科学・技術の水準をもってしても解決しきれない困難な課題にたち向かわなければならないからである。したがってまた私は、現段階では、教育のシステム化が教育革新への道ではありえないと考えている。

日々、何十万もの教師が繰り返し展開している授業について、教師があることがらをどう教えると、それが生徒にどのようなすじ道を辿って理解され、どのような経過で生徒の学力として定着するのか、また理解されないまま素通りしてしまう場合の障害はどこにあるのか、というような問題は、教育という営みのなかで極めて重要な意味をもっ

ている。ところが、私たちの知る限り、このような問題を系統的に追求していくうえで有力な手がかりとなるような研究は、全くといってよいほど欠けているように思われる。だからといって、すべての授業が系統的な手だても準備されずに無秩序に展開されているというわけではなく、少し誇張していうならば、ほとんどすべての教師は、多分に主観的な見とおしと多少の経験によって蓄積され、ある意味では技能化された手順にそって、（教師の判断による）教材の難易や生徒の反応によって何がしかの修正を加えながら、授業を展開しているといってよいのではなかろうか。授業過程に関する研究は、じつは全くないのではなく、最近数年の状況に限ってみても、教え方に関する研究者・教師の研究（と称するもの）はじつはおびただしい数にのぼっているのである。そして、教材を重要な媒介として成り立つ生徒と教師との緊張関係を、教師の側からの教え方の問題としてのみとらえる限り、教え方の研究は、それがどのように科学的にふん飾されていても、実際の教授過程の解明にはほとんど何の役にもたっていないというのがことがらの真相であろう。

二

教育界に、大略右にのべたような状況があるとするならば、教授過程の諸問題を、教師のさまざまな活動、教えられ学びとられようとされる教育内容、教授方法を明確化し教授活動を強化するための教具、授業を受ける生徒の既存の学力や学習活動、等々の諸要素とこれらの諸要素が相互に関連し、依存しあっている一つの複雑なシステムとしてとらえて、教授過程を科学的に解明しようとする企図は、重要な意味をもつと考えられるのである。しかしながら、教授過程を一つのシステムとしてとらえようとする企図には、わが国の教育の現状と、既往の教育学や教育心理学の研究の水準に照らしてみて、さまざまな制約があることを認めなければならない。

明治以後における教授活動が、ほとんどの場合に、三十人とか四十人という一定数の生徒を単位とした学級と称する集団を中心に成り立っている。このために、教授活動のシステムは、かりにどれ程単純化してとらえるにしても、一人の教師から一人の生徒への働きかけという単一の流れではありえない。それは、一人の教師から多数の生徒への働きかけであるだけでなく、学級は単純な烏合の衆でないから、学級内の生徒相互間に一定の緊張関係が存在すること、教師の教授活動へのリスポンスとしての生徒から教師への働きかけも無視できないのである。一人の生徒と一人の教師との間を考えただけでもかなり複雑なシステムであ

るから、一人の教師と多数の生徒という要素をふくんだ教授過程のシステムを解明することは容易なわざではない。教授過程をシステムとして把握しようとするばあいに、生徒の複数であることが現代の教授過程の一つの重要な特徴をなすものであるから、このことによって生ずる困難を避けるべきではない、と私は考える。もちろん、研究の途上では、一人の教師と一人の生徒との間で成り立っているシステムを解明することは必要であるし、重要である。私はこのことの重要さを否定するものではないが、個々の生徒と教師との間に成り立つシステムは、けっして学級全体に成り立っている学習のシステムの部分――一個の全体が小分割されて生ずる個別の部分ではないこと、いいかえれば、個々の生徒と教師との間に成り立っているシステムを寄せ集めると学級全体に関する教授過程のシステムが成り立つ、というような関係にはないことを銘記しておくことが必要であろう。

最近数年間に、すでに幾種類にものぼるティーチングマシンと呼ばれるものが開発され、一部のものが実用に供されていることは周知のところである。私の知る範囲では、今日実用化されているティーチングマシンは、個々の生徒の学習に関するものであるから、教室内での教師の教授活動に代わりうるようなものではない。ティーチングマシン自体は学習内容を創出することもできないし、与えられた個々の学習内容自体のもつ論理性や難易によって系統化するというような能力ももっていない。そのため、ティーチングマシンが生徒の学習活動そのものでありうるかどうか、あるいは学習活動を補助するうえに有効でありうるか否かは、機械に組み込む学習内容と学習順序に関するプログラムいかんにかかっている。プログラムをどう組むかという問題は、本質的には、機械としてのティーチングマシンの機能とは無関係で、教授学習過程をどのようなシステムとして把握するかという問題に帰着する。「学校教育におけるプログラム学習は一時ブームの観があったが、その後あまり発展していない」といわれる（経済審議会『日本の情報化社会』）。システムをどう把握するかという問題を解明する以前にティーチングマシンが登場し、この機械を使うためにどのようなプログラムを組むかという問題にぶつかったというのがことの真相であろうから、かりに一部の新しがりやの人々のあいだで一時的なブームとなったとしても、ティーチングマシンを受け入れそれをブームとして持続させうるような基盤はなにもできていなかったのである。ティーチングマシンというおそらく教授過程のシステムの最も単純な部分を機械化したものでさえも、教育の世界には容易にはいりそうにないように、私には思われる。

それは、機械が高価だからとか、教師が多忙なためにプログラムを準備するのに要する時間がないからだ、というような理由だけによるものではない。たしかに、わが国の公教育の貧困は、どれほど安価なものにしても数十台のティーチングマシンをすぐに導入しうるような余裕をもたない。また、教授活動という教育本来の仕事のほかに、雑務と呼ばれるものをも含めてありとあらゆる仕事に追われている教師は、じっくりとプログラムを研究し編成する時間的な余裕をもっていない。プログラム学習をうけつけようとしないこれらの障害は、もちろん、日本の教育のすみずみまでしみ込んでいる教育財政の貧困という病根に由来している。

しかし、私には、じつはもっと根深い病根があるように思われる。前にものべたように、現代日本の教育界では、教授過程を一つのシステムとして把握しようと企図することは重要な意味をもっている。ところで、教授過程という一つの大きなシステムのなかで、最も重要な要素となるのは、学習のプログラムをどう組むかということではなく（このことの重要性を否定するものでないことは前にのべた）、学習過程に教育内容として何をとり入れるかという問題である。教育内容としての知識や理論は、それぞれの知識や理論が形成される論理的な背景をもっている。それは決して一つではなく、多くの場合、複雑にからみあった複数のものである。また、教育内容としての知識や理論を発展させるばあいにも、他の要因とからみながらいくつもの可能性をもってはいるが、基本的には、当の知識や理論自身が内包している論理性がきめてになってくる。教授過程の実際の場では、このような教育内容の自身のもつ内容や系統性と、子どもの思考との間のさまざまな相互関係をふくみながら、学習活動が発展すると考えられるのである。ところが、わが国では、周知のように、教え方はとにかくとして、教育内容の重要なことはすべて国家（文部省）が決めるという方針がとられており、この方針にしたがって教科書の検定も、近年では国定に近いといわれる程に強化されている。

教育内容が国家基準として定められているということは、教授過程というシステムの最も重要な部分が、動きのとれない硬直したものになっているということである。教授過程をシステムとしてとらえ、教授活動を創造的に発展させるための研究をすすめるためには、教育に対する国家統制を排除することが決定的に重要な意義をもつと考えられるのである。

〈専修大学教授〉